

1 級河川・高梁川下流域における 水門遺構「蔵水門」について

原 孝吏¹

¹学生会員 放送大学大学院文化科学研究科 (〒261-8586 千葉県千葉市美浜区若葉2丁目11番地)

E-mail:kudl980302@mx3.kct.ne.jp

高梁川は広島県の一部と岡山県を流域とする河川で、岡山県新見市にある標高1,188mの花見山を源として、備中平野を南流し瀬戸内海に注いでおり、その流域面積は2,670km²の1級河川である。

この高梁川下流域の一部で、今から約350年前に干拓事業で誕生した旧高沼村地区に「蔵水門」がある。「蔵水門」は、当時は瀬戸内海の潮汐の影響を受けながら干拓地域である倉敷市帯高地区の田畑を灌漑していた。「蔵水門」は、六間川にかかる石造橋で、昭和32年の児島湾干拓により汐留水門としての役割を終え、水門を併設した道路橋として利用されてきた。その水門と道路橋も、六間川の河川改修と新橋梁の架橋により長きにわたる役目を終えて、その一部を保存することになった。

Key Words; 1st-rate River; Takahashi River, Water Gate monument; "Kurazuimon"

1. 1 級河川・高梁川下流域の現状

(1) 1 級河川高梁川について

高梁川は、岡山県新見市の花見山（標高1188m）を源流とし、高梁市と総社市を経て、倉敷市の水島地域と玉島地域の間を流れて水島灘に流れこんでいる。河川として、幹川流路延長は111km（全国44位）、流域面積2,670平方kmで流域を岡山県と広島県に有している。

高梁川は古くは「川島川」という名前で記されており、その後は「川辺川」や「松山川」など、それぞれの時代に栄えた町の名前をつけて呼ばれてきた。明治時代になって、備中松山が「高梁」と改称されてからは、現在の「高梁川」という名前になった。

近世の備中松山は、高瀬舟による水上輸送の中継地としてにぎわっていた。江戸時代の最盛期には、高瀬舟の航路は本流北部の新見、成羽川上流の東城、小田川上流の井原のあたりまで整備され物資集散の大動脈となっていた。

高梁川下流部は、倉敷市で東高梁川と西高梁川の2本の流れに分かれていた。明治25・26年の連年の大洪水で大被害を受けたため、明治40年から西高梁川に本流を1本に統合改修工事が行われ、約20年の歳月をかけて完成された。これ

によって、東高梁川は廃川となり、旧堤防には水島臨海鉄道が走り、廃川地には倉敷レーヨンが進出し、河口部の水島地区には水島臨海工業地帯が形成されてきたのである。

(2) 高梁川東大川改修事業について

明治時代までの高梁川の堤防は簡単なものであったため、洪水の度に大きな被害を受け、永年の間多くの人々を苦しめてきた。そこで、明治16年頃から毎年、県に「高梁川の改修について」の陳情がなされ、また、国への強力な働きかけがなされた。こうした努力が実り、明治40年（1907年）春、内務省が高梁川改修の基本計画を示し、明治44年（1911年）に内務省直轄工事として改修工事が開始された。この改修工事は、明治になって国が行った河川改修工事の中で最も古いものの一つであった。

この計画の基本は、高梁川が山間部無堤部から離れ、沖積平坦な有堤部に出た後から海に至る間の河道を改修することにあった。水害の最もひどかった倉敷平野を中心に実施されることとなり、高梁川は東高梁川と西高梁川に分岐し二大流に分かれて海に達しており、大きな変更を加えることなしには改修計画の基本は成り立たないのであった。また、河状の変更は従来の用水の取水や配分に大

変革を余儀なくさせたのである。

これにより、山間部では西高梁川が、下流部では東高梁川が廃川となり、東高梁川の廃川地は耕地や工場敷地となり、西高梁川の廃川敷は干ばつに備え、農業用水の補給用の貯水池（柳井原貯水池）となった。

改修工事は、総社市湛井から倉敷市水島の河口に至る全長約24kmに及ぶものであり、14年の歳月を費やした世紀の大事業であった。

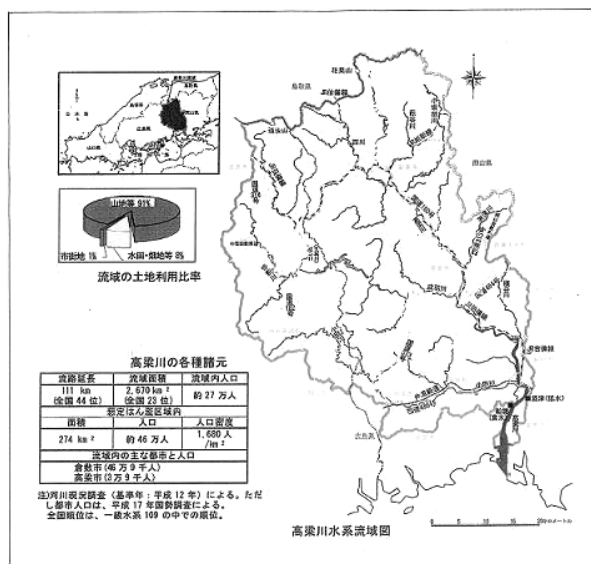


図-1 高梁川水系流域図¹⁾

2. 近世以降の高梁川下流域の干拓事業の経緯

江戸時代になり平和が訪れたことによって社会が安定すると、領主は領国経営に乗り出し、領民もそれに応え自らの地域形成を行った。高梁川下流域においても河口部に広がる干潟や中洲などの湿地の新田開発が積極的に行われた。

近世以降の干拓の経緯を（図-2）及び（表-1）に示した。代表的な干拓事業としては、戦国時代の宇喜多開墾、慶長年間の倉敷村、渋江村の干拓事業である。また、明治～大正時代に国家的事業として進められた高梁川改修工事によって生み出された東高梁川の廃川地は工業化のための事業用地や公共用地、住宅地として活用された。

この河川改修事業は、高梁川下流域の用水路を一体的に再配置することにもなり、大正14年に高梁川東西用水が整備された。この用水は、八ヶ郷・倉敷・備前樋・南部・西部・西岸の六用水で、倉敷市や早島町の耕作地を潤している。

さらに、河口部の水島灘では農業用に干拓された土地が、工業用地として整備され、水島工業地帯が高梁川下流域に形成される要因にもなったと考えられる。

図-2 近世以降の高梁川下流域の干拓事業区域²⁾

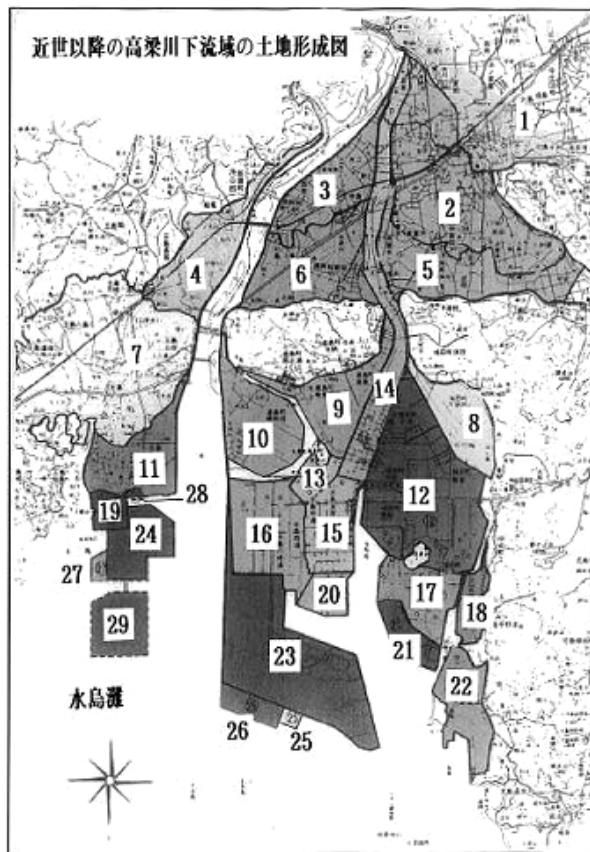


表-1 近世以降の高梁川下流域（倉敷地域）の土地形成

ブロック 番号	現在地名	新田名	開拓年代		面積
			年号	西暦	
(1)	倉敷市 倉敷	宇喜多開墾	天正13年	1585 年	56.0 ヘクタール
(2)	倉敷市 安江	倉敷村本田	慶長 6 年	1601	
	倉敷市 沖	渋江村新田			
	倉敷市 四十瀬	福島新田			
	倉敷市 富井	沖新田			
	倉敷市 老松	西十瀬新田			
	倉敷市 西中新田	東富井新田			
	倉敷市 白家町	倉敷後新田			
		西中新田			
		白家町新田	元和 6 年	1620	
(3)	倉敷市 清津	河内新田	寛永元年	1624	330.0
(4)	倉敷市 西岡	船越新田	正保元年	1644	
	倉敷市 浅口	船越新田	寛永元年	1624	260.0
	倉敷市 浅口	船越新田	寛永元年	1624	
(5)	倉敷市 倉敷	世間新田	寛永 6 年	1629	
	倉敷市 福井	福井新田	寛永 8 年	1631	
	倉敷市 吉岡	吉岡新田	寛永 8 年	1631	
	倉敷市 堀川	倉敷乙未新田	寛永 20 年	1643	31.3
	倉敷市 越前	越前新田	寛永 20 年	1643	85.8
	倉敷市 八軒	八軒新田	正保 2 年	1645	
(6)	倉敷市 西岡	西岡新田	寛永 6 年	1629	55.0
	倉敷市 片島	西岡新田	元和 2 年	1615	56.6
	倉敷市 北面				
(7)	倉敷市 玉島	玉島新田	万治 2 年	1659	40.0
	倉敷市 浅口	浅口新田	寛文元年	1660	20.0
	倉敷市 八重、道口、七島	八重、道口、七島新田	寛文10年	1670	120.0
	倉敷市 玉島	阿賀崎新田	寛文 5 年	1665	120.0
(8)	倉敷市 堀田	堀田新田	享保 9 年	1728	352.0
(9)	倉敷市 速島	龜島新田	文化 3 年	1806	208.0
(10)	倉敷市 速島	鶴新田	文政 8 年	1826	314.0
(11)	倉敷市 乙島	上成新田	寛文 4 年	1664	76.0
	倉敷市 乙島	乙島新田	文久 3 年	1863	120.0
(12)	倉敷市 堀田	堀田新田	嘉永 5 年	1852	700.0
(13)	倉敷市 速島	堀田新田	明治末期～大正2年		100.0 (450.0)
(14)	倉敷市 水島	高梁川下流川知水島	大正10年～昭和18年	1921～1943	60.0
(15)	倉敷市 堀田	堀田地区	昭和18年	1943	228.3
(16)	倉敷市 速島	高梁川干拓(D)	昭和22年	1947	428.4
(17)	倉敷市 堀田	堀田干拓(B)	昭和22年	1947	254.1
(18)	倉敷市 堀田	堀田干拓(C)	昭和22年	1947	93.6
(19)	倉敷市 玉島	E 地区埋立	昭和24年	1949	31.7
(20)	倉敷市 水島	A	昭和28年	1953	90.7
(21)	倉敷市 水島	B	昭和34年	1959	103.9
(22)	倉敷市 堀田	C	昭和33年	1958	228.4
(23)	倉敷市 水島	D	昭和40年	1965	789.3
(24)	倉敷市 玉島	E (第1期、2次)	昭和42年	1967	164.2
(25)	倉敷市 水島	D	昭和40年	1965	21.5
(26)	倉敷市 水島	D	昭和52年	1977	96.3
(27)	倉敷市 玉島	E (第1期、3次)	昭和53年	1978	47.5
(28)	倉敷市 玉島	E	昭和60年	1985	4.1
(29)	倉敷市 玉島	E (第2期)	昭和62年	1987	245.6

3. 蔵水門について

「蔵水門」(写真-1)は倉敷市帯高地内の六間川に架かっている。架橋された年代は、寛文四年(1664年)と言われており、岡山県下では最大級の石橋樋門である。

六間川は江戸時代、寛文三年に用水確保と悪水吐川を兼ねたものとしてつくられ、宝永四年に川幅が六間に広げられてこの名前と呼ばれるようになった。

また、六間川は船入川でもあり、陸軍省参謀本部が明治十二年に出版した「共武政表」によると、沿岸の旧帯江領亀山・五日市、旧早島領中帯江各村に1～4艘の船があった⁵⁾。この頃の蔵水門は、彼岸から翌夏の用水囲いまで水門を開けたままにして船を通しており、夏の用水囲いから秋彼岸までは、通船のたびに水門を揚げ下ろししていたのだろう。六間川が昭和32年に児島湾の締切りにより瀬戸内海から分断されるまで、舟運路として利用されながら、旧高沼村(現倉敷市帯高)の田畑を潤すために水門としての役割を果たしてきた。



図-3 「蔵水門」の位置³⁾

4. 土木遺構としての蔵水門の保存について

現在、岡山県によって六間川の河川改修事業が進んでおり、「蔵水門」も護岸改修工事により撤去されることとなっている。この水門を保存しようとする運動が地元関係者から起き、事業主体である岡山県や倉敷市に対して保存のための要望が出された。その結果、倉敷市によって、現在架かっている場所から近接する都市公園内に保存されることが決まっている。できるだけ現存する形での保存が望ましいのであるが、橋梁の上部部分のみ保存することで、かつての水門の風情をできるだけ残すように保存計画が進んでいる。



写真-1 「蔵水門」(倉敷市帯高地内)⁴⁾

5. 参考文献

- 1) 国土交通省 中国地方整備局：高梁川水系整備計画，pp.3-17，2010.
- 2) 岡山県：水島港 第29版，1998.
- 3) 高梁川東西用水組合：高梁川東西用水組合関係用水路及び灌漑区域図，1925.
- 4) 倉敷市：倉敷市史3 近世(上) . pp.396
- 5) 倉敷市：倉敷市史3 近世(上) . pp.651-664

(2016. 4. 11 受付)

ABOUT “KURAZUIMON” WATER GATE MONUMENT ON THE LOWER BASIN OF FIRST-RATE TAKAHASHI RIVER

Takashi Hara

This paper is about water gate monument called “Kurazuimon” on the lower basin of first-rate Takahashi river. “Kurazuimon” was built on 1664 to control tide flow and irrigation for Takanuma village in an Edo era.